

激動の新型コロナ対応をして責務に尽力する



香川県西讃保健福祉事務所次長
兼 香川県西讃保健所長
神野 敬祐

2010年香川大学卒業。同大学にて卒後臨床研修センター、同旧第一内科(内分泌代謝・血液・呼吸器・膠原病内科学)および県内関連病院にて診療に従事。2018年より同救命救急センター、大院(救急災害医学講座)にて診療、研究に従事。2022年大学院修了、同年、香川県入庁。2024年度より現職。健康づくりで気を付けていたのは「極力階段を使う」。

香川県西讃保健所長の神野敬祐です。諸先輩方のリレーで続く伝統ある本シリーズに執筆の機会を頂き、光栄であると同時に緊張しております。「言いたいこと」ほどではなくとも、業務の振り返り、近況、展望について紹介いたしますので、何かの参考になればと思います。

自己紹介

全国で813番目に多い苗字（2025年10月2日時点）であります「神野」姓は、愛媛県では多く見られます。言語習得時期には、愛媛県、岡山県、香川県を親の仕事をの都合で渡り歩く過程で、方言のトライリンガルを習得、小・中・高校・大学に至るまでは一貫して香川県民として育つ中で、医学に一生を捧げようという気は特になく、森鷗外、手塚治虫（医師免許を持つ文化人）といったのが何となくかつこいいという不遜な「無理・無茶・無謀」ともいう動機のまま、香川医

大（現香川大学）から補欠合格を頂きました。地元愛や世直しといった熱い志も足りていなかつたことを白状いたします。

公衆衛生医師を志すきっかけ

学業には幾分の難がありながらも、何とか卒業し、初期臨床研修から内科医時代（主に血液・内分泌）に大学病院や地域で診療に従事する中で感じたモヤモヤ（治療して退院しても、次から次へ心不全や脱水、肺炎といった普段の生活と医療介入が整えば管理可能な疾患で病院リピーターとなる患者の現状に対するやるせなさ）に諸事情もあり、

軸足を救急医に移しました。

若者の自殺や子どもの虐待疑い、高齢者のセルフネグレクトの事案などにも関わる中で、市町の福祉の担当者や児童相談所といった行政の立場の方ともやりとりの機会がありました。一方で、さまざまな社会問題の終着駅の一つが救急外来のは分かりますが、その上流である地域住民の生活がどうなっているか知らないことに（ようやく）気付きました。

公衆衛生医師も始めよう ～三足のわらじの時期～

健康を損ねる人を減らすといふ命題に気付いて（今さら?）からは、救命センター業務の一方で大学院へ進学し、博士研究を進める傍ら、大学の公衆衛生学教室の講座セミナーに参加したり、自治体の行政医師の先輩医師を訪問する中

い変化を伴い、マネジメント業務の重要さを日々実感していました（生きは周囲についていくのが手いっぱいだった、という説も）。

新しい地域へ異動～活動の視野を広げる～

これまでの新型コロナ対応一色であつた保健所風景から、2023年度は新たな地域への赴任、新型コロナの5類移行に伴う新たな入院調整支援体制への移行や、特に国立保健医療科学院の保健福祉行政管理分野の分割前期課程の受講もあり、公衆衛生活動の視野が広がった時期でした。この時点では新型コロナ以外の公衆衛生活動の経験がほぼなく、系統立てて過去から現在の保健・福祉の勉強ができたのは、現在の業務にも生きていますし、全国から集つた仲間も得て内心大変に心強かったです。また、組み合わせる配置等の配慮もいたしました。

2022年度は、年末年始のオミクロン株の上陸（第6波）から第7・8波を受け、日々、災害級の対応となりました。膨大な国の通知を受けて、施設対応範囲の変更、発生届の4類型のみへ限定化といった未曾有の事態への対応に際しては、発生届受理、積極的疫学調査、療養方針の決定、接触者検診、健康管理の受け入れといった、目まぐるしくお願いいたしました。

2021年度に入り、デルタ株が流入（第5波時期）、中讃保健所管内でもまん延し、比較的若い人の肺炎合併や重症化例の出現に伴い、入院調整の負荷増大が起きました。また、大学病院の救命センターの勤務日では患者受け入れ後の呼吸管理の打診がしばしばとなりました。残りの貴重な大学院期間は新たなテーマでの研究までは行き着きませ

んでした（新型コロナのせいにしておこう）。

公衆衛生の世界へ転職～行政の人として～

保健所業務に嘱託で3年間関わらせてもらうことで、プレホスピタルのさらに手前である、地域で感染の連鎖を疫学調査を通じて突き止め・封じ込めるという、古典的ながら地域を舞台に活動するダイナミックな公衆衛生活動の魅力を改めて実感していました。

かねてよりの転職意向を大学に明確に示すことを決意したところ、議論やその検体採取（いわゆるドライブルー）業務や、保健師さんの見よう見まねでの疫学調査、就業制限の説明、患者搬送などに従事しました。

2020年の冬、県内で鳥インフルエンザ事案が多発し、防疫従事者対策推進計画や、市町と連携した対策について知ることができました。

県での健康づくり課題や循環器病健診のデータ整理などに関わり、当県の健康づくり課題や循環器病対策推進計画や、市町と連携した対策について知ることができました。

2020年の冬、県内で鳥インフルエンザ事案が多発し、防疫従事者の健康観察業務も並行して対応が必要になる時期が長期間続いたことなども契機に、本府勤務日も保健所での勤務日に振り替え、新型コロナ患者発生時の接触者検診の協議やその検体採取（いわゆるドライブルー）業務や、保健師さんの見よう見まねでの疫学調査、就業制限の説明、患者搬送などに従事しました。

2021年度に入り、デルタ株が流入（第5波時期）、中讃保健所管内でもまん延し、比較的若い人の肺炎合併や重症化例の出現に伴い、入院調整の負荷増大が起きました。また、大学病院の救命センターの勤務日では患者受け入れ後の呼吸管理の打診がしばしばとなりました。

残りの貴重な大学院期間は新たなテーマでの研究までは行き着きませ

んでした（新型コロナのせいにしておこう）。

公衆衛生医師を志すきっかけ

学業には幾分の難がありながらも、何とか卒業し、初期臨床研修から内科医時代（主に血液・内分泌）に大学病院や地域で診療に従事する中で感じたモヤモヤ（治療して退院しても、次から次へ心不全や脱水、肺炎といった普段の生活と医療介入が整えば管理可能な疾患で病院リピーターとなる患者の現状に対するやるせなさ）に諸事情もあり、

大（現香川大学）から補欠合格を頂きました。地元愛や世直しといった熱い志も足りていなかつたことを白状いたします。

公衆衛生医師を志すきっかけ

学業には幾分の難がありながらも、何とか卒業し、初期臨床研修から内科医時代（主に血液・内分泌）に大学病院や地域で診療に従事する中で感じたモヤモヤ（治療して